

# 浦島蘇生 山崎正之

## — 伝承と結末 —

ひどく目の粗い話になって恐縮であるが古代伝承や物語を読んで、それから近代・現代の作品を読んで、あれこれ気にかかることが出てくる。

むしろその両者は、いつでも同じ土俵の上で比較され論じられる、というわけにはいかないだろう。近代における自我の確立がもたらした意識の変革が、作品の主人公たちに自律性を与えることになり、それだけでも伝承や物語の登場人物とは明らかに一線が画される。近代の人間は、いかような地位・環境等にあろうとも、そのことは何ひとつ本質に直接かわわってくる条件ではない、ということを知っている。

他方、伝承や物語のなかの人物は、そうした条件の範囲内でしか行動できないので

ある。それは初めから「人間」を考えることとは無縁なところで、つくり出され享受されて来た——つまり作品の焦点に大きな開きがあったといわなければならぬ。

そこで考えることは、伝承や物語をさかのぼればさかのぼるほど、その語りはある具体的な目的・意図のもとに完結した事象であったのではないか、と思うのである。かくかくしかじかの経過をへてこうした状態にたち至った、と閉じる。その場合、結末はその語りの結論でもあるわけなのだ。すべてがそうだなどは断定できはしないだろうが、初期の伝承において重要な役割をになつていたのでなかつたか。

たとえば、いわゆるハッピーエンドなる結末が、複雑に錯綜する現代社会に生活す

る者にとって、いったいどれほどの実感をもって受けとめられるであろうか。せいぜいそのことは、ある過程の一段落、エピソードに過ぎないものだといいたい。人の一生を考えてみても、ほぼ同じようなことになるだろうと思われる。

一族の伝承の中核となるものは、始祖の英雄的な行動およびその到達、成就した事業そのものでなければならぬ。そしてそれは、伝承者たちにとってまぎれもないハッピーエンドなのであって、誇りたかく言い継ぎ語り継がれたであろうことは十分に察せられよう。やがて時代の進展と共に、一族のセクシヨナリズムが稀薄になるにつれて、伝承は共同体の平均的な関心のなかに取りこまれ、その風土的環境や生活のサイクル等に俾付けられながら、説話的世界のものとなつて行く。

浦島伝承の成立をめぐっても、おそらく述べたごとき経過を考えてみる必要はあるのだろう。しかし『万葉集』巻九に歌われたところで、すでに「いにしへ」のこととして固まつており、しかも主人公の浦島の死は何よりもかによりも決定的な結末なの

である。別途に「丹後国風土記逸文」の冒頭には「此人夫日下部首等先祖。名云筒川嶼子。爲人。姿容秀美。風流無類。斯所謂水江浦嶼子者也」との記述がみえ、地方性と始祖を語る明白な態度が示されている。この場合、傍点部分でもわかるようにまず本人自身がすぐれた存在（英雄的資質を意味しよう）なのであった。『万葉集』にはないこの一項を取りあげても、両者の伝承意図の相違が認められるはずだ。

あらためて指摘するまでもなく、片や長歌でいま一方は散文なので、そこにおのずから描写叙述の精粗の生じてくるのは当然として、ほとんど同一の経緯をたどりながら、「風土記」では主人公を死に至らしめていないことが最も大きい示唆となるであろう。

玉匣を開くと、忽ちに彼の若く美しい姿態は風雲にもなわれて蒼天に飛び去った——ということは、そのあとに残されたのは老いさらばいた一人の男だった。『万葉集』で、立走り袖振り、こいまろび足ずりするうちに皺だらけとなって黒髪もみるみる白髪に変わった、という。その直後に息

絶えた彼は、そこですべてのピリオドを打ったのだ。説話の型として、完璧に近い。「風土記」の嶼子の肉体から、神仙の要素（仙女と結婚して得た不老不死）は消え、再び現実界に戻された彼は涙ながらに徘徊する。続けて記されている神女との歌の交換（相聞）は、あとからの付け足しと思われる。始祖のなかに、なお信じていたかった伝承者の期待がこうした形を加えさせたものだろう。

本来、主人公の死で閉じるのは悲劇的結末に違いない。が、浦島伝承の伝える彼の死は、果たして悲劇的様相をみる中に入るといえるのだろうか。現実界にあれば、とうの昔に死んでいたのであって、読者にはそれが分っているだけに、浦島の死は来るべきものが来たという事態でしかないようだ。ただ、神仙郷（常世）での時間経過の較差が一度に襲いかかり、瞬時にして老人となる変様の設定の方に比重があったし、それこそが眼目であったとすれば、浦島の死はそのためにこそ用意された虚実皮膚の焦点のごとくである。

老人とはなったが「風土記」の浦島は死

ななかつた。死なせたくなかつた心情が、それからの彼の動向を逆に奇妙なことにしてしまったのは何とも皮肉ではないか。そこで語り出されて来たのが、浦島に羽根がついて鶴になったとする伝えのように思われるのである。あるいはまた、箱から出た煙ののって天にのぼったといひ、これには神女との結婚も老人となったこともなく、更に単純化された趣きがつよい。

上代における文芸的なものへの道程で、外来の神仙思想の果たした役割はまことに大きいものがある。しかし、文芸としての世界にはじめから定着したとはいえない。第一、神仙的思考の目標は現世での願望の充足といつてよく、その追究の結果が現実界を飛び出してしまったところに、別様の展開相が結びつく原因があった。

『万葉集』の浦島にも神仙思想の投影は見出されるが、その死によって現実感を浮上させたのに対し、「風土記」の浦島蘇生には神仙化の中に溺れこんだために失われたものの方が多かったと考えるのである。